

の個體数の増減を観察した。兩種とも5月10日頃より現われ6月1日頃最高密度に達する。分布型は極く初期には Poisson 型であるが、増殖後は集中的になる。

27. ムギのアブラムシ類の棲みわけ機構に関する研究(第2報) 2種以上の混棲と葉の選擇

(農技研) 伊藤嘉昭

オオムギの株上でトウモロコシアブラムシは心葉に、ムギヒゲナガアブラムシは下葉に寄生する。それぞれの niche が飽和に達すると、兩種ともそれ以外の葉に進出するので混棲がおこる。株當りの密度がさらに高くなると近くにある他の株へ移動するが、その際には前者は心葉へ、後者は下葉へ移動する。

28. モモアカアブラムシ増殖についての2, 3の知見

(農技研) 宮下和喜

閉鎖された1本の植物の上でのモモアカアブラムシの増殖状況を観察した。1本のキャベツの上でモモアカアブラムシが最初に好んで寄生する部位は先端と下位の葉であるので、初期の密度はこれらの部位が高いが、増殖が進むにつれて密度はかえって中位葉が高くなる。

29. モモアカアブラムシ2系統の生態學的知見

(農技研) 田中正

単性生殖のみでジユウジ科植物上に生活するモモアカアブラムシの緑色及び赤色2系統をキャベツ葉で個體飼育した結果では産仔数及び仔虫期間に明かな差異を認めなかったが、放飼したものでは、緑色系統は産仔数多く、若葉へ集る傾向があるのに反して、赤色系統は産仔数やゝ少く且つ成熟葉に集る傾向があつた。

30. モモアカアブラムシの生態に就いて

(宇都宮大農) 柴田文平

この種の生態一般と染色体に就いて昭和15年に發表した時に単性生殖系統は1月以後に死滅すると結んだ。この種は秋中間寄主上に産雌虫(gynopara)と雄とが現われ主寄主へ歸るが、単性生殖を続けて越冬する状態はその地方の寒さによつて異なる。そしてこの単性生殖系統からは唯1回の飼育實驗であるが秋産雌虫及雄の出現を確める事は出来なかつ

た。飼育中緑と緋色(體色)の2系統が現われた。

31. ムギヒゲナガアブラムシの寄生蜂に就いて

(北陸農試) 杉山章平・*川瀬英爾

コムギの害虫であるムギヒゲナガアブラムシの第1次寄生蜂にはムギヒゲナガアブラバチ、クロアブラバチ、*Aphidius* sp., ツヤコバチ科、ヒメコバチ科、トビコバチ科の夫々1種がある。これらのアブラバチ科の第2次寄生蜂としてはケヅカクロバチ、ナワコガネコバチ、*Charips* sp. A, *Charips* sp. B, がある。この寄生蜂の種類によつて寄主の形態は變化し、寄生蜂の脱出する位置と脱出孔にはそれぞれ特徴がある。

32. 甘藍ゴマ斑の分布について

(岩手農試) *大森秀雄・菅原寛夫・大矢剛毅

葱類の害虫として知られているネギアザミウマが甘藍に寄生してゴマ斑を惹起させる點について若干の調査を試みた結果、岩手縣以外にも甘藍に寄生し、ゴマ斑の形成されることが判明したが、何れも極めて少なかつた。

これは栽培時期が相違、特に暖地に於ては、この害虫の蔓延する時期を耕種的に回避している爲ではないかと思われる。又虫の生態型や甘藍の品種的な問題もあるやに推測される。

33. オオニジュウヤホシテントウ幼虫の棘毛による令期の判定について

(信州大繊維) *小山長雄・福島融

オオニジュウヤホシテントウ幼虫の體表に着生している6列棘毛は各令期によつて著しく形態が異なる。特に棘毛の分岐数は最もよく令の特徴を表わすものでこれによつて容易に幼虫の令期を判定しうる。

34. *Epilachna* 屬に関する諸問題(特に *pustulosa* と *vigintioctomaculata* の F₂ の食性について)

(豫研昆虫) 安富和男

北海道と群馬縣で採集したコブオオニジュウと本州産オオニジュウとを交雑させて生じた F₁ 同志を更に交配して生じた F₂ の幼・成虫の食性と形態とを調べた結果に就いて述べる。

35. コバネイナゴの孵化(續)

(三重大農) 白井重雄

イナゴは普通日中に1卵塊が一齋に孵化する。エゾイナゴでも同様で、同じ實驗室では約2週間孵化